仙台市文化財調査報告書第288集

郡山遺跡

── 第162次1区・第164次発掘調査報告書 ──

2005. 3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第288集

郡山遺跡

―― 第162次１区・第164次発掘調査報告書 ――

2005. 3

仙台市教育委員会

序　　文

日頃より仙台市の文化財保護行政に対しご理解・ご協力を賜り感謝申し上げます。市内には現在約800ヵ所の遺跡が確認されておりますが、このような埋蔵文化財はその時代ごとにその地に住んだ人々の痕跡を伝えるものであり、現代の各種開発事業によって絶えず破壊・消滅の恐れにさらされております。当教育委員会としましては皆様のご理解とご協力を得て、貴重な文化財を保存し、後世に伝えるように努めているところであります。

ここにご報告いたします郡山遺跡は、地方官衙としてはわが国でも最古段階の重要な遺跡です。これまでの調査の結果、Ⅱ期官衙は奈良時代に多賀城が置かれる以前に陸奥国を治めた国府であることが明らかとなりました。この遺跡の内容が明らかになってきたのも、昭和54年以来実施している性格解明と範囲確認のための国庫補助による発掘調査に負うところが大きいと言えます。しかし今回のような開発事業者の御理解を得て実施した調査の積み重ねによる成果も見逃せません。

本書は平成16年度に行われた第162次調査１区・第164次調査の結果をまとめたものです。これらの調査を通して、官衙の範囲や構造がより明らかになってまいりました。この成果が地域の歴史の解明と文化財保護思想高揚のため、お役に立てば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行まで多くの方々のご指導、ご協力をいただきましたことに対して、心より感謝申し上げます。今後とも文化財保護行政についてご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成17年３月

仙台市教育委員会
教育長　阿　部　芳　吉

例　　言

1．本書は宅地造成工事に伴う郡山遺跡第162次１区・第164次発掘調査の本報告書である。
2．本調査は民間の開発事業に伴って行われた発掘調査である。
3．発掘調査及びその報告書の刊行に当たっては地権者である齋藤たりよ氏、庄子善絶氏・庄子はるの氏の各位に絶大なご理解とご協力をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。
4．本書の執筆・編集は仙台市教育委員会文化財課調査係　三塚博之が行った。
5．調査および報告書作成に関する諸記録、出土遺物などの資料は仙台市教育委員会が保存している。

凡　　例

1．遺構図の平面配置図は相対座標で、座標原点は任意に設定したNo.１原点（X＝0，Y＝0）とし、高さは標高値で記した。
2．文中で記した方位角は真北線を基準としている。
3．遺構略号は以下のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

ＳＡ　柱列などの塀跡	ＳＥ　井戸跡	ＳＸ　その他の遺構
ＳＢ　建　物　跡	ＳＩ　竪穴住居跡・竪穴遺構	Ｐ　ピット・小柱穴
ＳＤ　溝　　跡	ＳＫ　土　坑	

4．報告書中の全体図及び遺構平面図においては、攪乱と新しい重複遺構は、省略または簡略化している。
5．遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

Ａ　縄文土器	Ｆ　丸瓦・軒丸瓦	Ｋ　石製品
Ｂ　弥生土器	Ｇ　平瓦・軒平瓦	Ｌ　木製品
Ｃ　土師器（ロクロ不使用）	Ｈ　鴟　　尾	Ｎ　金属製品
Ｄ　土師器（ロクロ使用）	Ｉ　陶　　器	Ｐ　土製品
Ｅ　須恵器	Ｊ　磁　　器	

6．遺物実測図の網スクリーントーン張り込みは黒色処理を示している。
7．本書で使用した土色については「新版標準土色帳」（古山・佐藤：1970）を使用した。
8．第５図　SB2110の柱痕跡は柱穴の底面における柱痕跡を図化している。

目　　次

序　文
例　言
凡　例

Ⅰ　調査要項……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……1
Ⅲ　第162次調査１区
1　調査に至る経緯と調査方法……5
2　基本層序……9
3　発見遺構と出土遺物……9
1）掘立柱建物跡……9　2）竪穴住居跡……10
3）溝跡……11　4）土坑……12
5）ピット……14
4　まとめ……15
参考文献……15
Ⅳ　第164次調査
1　調査に至る経緯と調査方法……20
2　基本層序……25
3　発見遺構と出土遺物……25
1）A区……26　2）B区……26
3）C区……29　4）D区……29
5）E区……29　6）F区……29
7）出土遺物……29
4　まとめ……30
参考文献……30

挿図目次

第１図　郡山遺跡と周辺の遺跡……3
第２図　郡山遺跡全体図……4
第３図　第162次調査１区位置図……5
第４図　第162次調査１区遺構配置図……6
第５図　第162次調査１区北端・中央北半平面図……7
第６図　第162次調査１区中央南半・南端平面図……8
第７図　ＳＢ2110掘立柱建物跡断面図……9

第８図　ＳＩ2162竪穴住居跡……10
第９図　ＳＩ2167竪穴住居跡……11
第10図　第162次調査１区溝跡断面図……13
第11図　第162次調査１区土坑断面図……13
第12図　第162次調査１区出土遺物……14
第13図　第164次調査区位置図……20
第14図　第164次調査区遺構配置図……21・22
第15図　第70次調査区遺構配置図……23・24
第16図　第164次調査Ｂ区東壁断面図・Ｅ区北壁断面図……25
第17図　第164次調査Ａ区・Ｂ区平面図……27
第18図　ＳＩ1031竪穴住居跡掘り方……28
第19図　第164次調査区溝跡断面図……29
第20図　第164次調査区出土遺物……30

表　目　次

第１表　第162次調査１区基本層序……9
第２表　第162次調査１区ピット観察表……14
第３表　第164次調査区出土遺物一覧表……29

写真図版目次

図版１　第162次調査１区調査区全景……16
図版２　第162次調査１区掘立柱建物跡・竪穴住居跡……17
図版３　第162次調査１区溝跡……18
図版４　第162次調査１区土坑・出土遺物……19
図版５　第164次調査Ａ区・Ｂ区……31
図版６　第164次調査Ｂ～Ｆ区……32
図版７　第164次調査Ｅ区・出土遺物……33

Ⅰ　調査要項

1．『第162次調査１区』

遺跡名	郡山遺跡（宮城県遺跡番号01003）
調査地点	仙台市太白区郡山三丁目２－１外地内
調査期間	平成16年７月28日～平成16年８月27日
調査対象面積	200㎡
調査面積	180㎡
調査原因	宅地造成工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会生涯学習部文化財課
担当職員	整備活用係　主任　平間　亮輔　　調査係　文化財教諭　三塚　博之

2．『第164次調査』

遺跡名	郡山遺跡（宮城県遺跡番号01003）
調査地点	仙台市太白区郡山五丁目144－１及び144－８
調査期間	平成16年10月12日～平成16年11月２日
調査対象面積	360㎡
調査面積	280㎡
調査原因	建売住宅敷地造成工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会生涯学習部文化財課
担当職員	整備活用係　主任　平間　亮輔　　調査係　文化財教諭　三塚　博之

Ⅱ　遺跡の位置と環境

郡山遺跡は仙台市の南東部、太白区郡山二～六丁目に所在する多賀城以前の役所跡・寺院跡で、JR長町駅の南東に隣接している。その範囲は東西800m、南北900mに及び、面積は約60万㎡である。

宮城県中央部の地形は、山形県境沿いの奥羽山脈より発生する陸前丘陵、その東に広がる宮城野海岸平野よりなる。広瀬川と名取川が陸前丘陵を東流しており、その間の丘陵地は青葉山丘陵、広瀬川以北は七北田丘陵、名取川以南は高館丘陵と命名されている。両河川は中流域で４～５段の段丘地形を発達させ、東の下流域に沖積作用により宮城野海岸平野を形成している。宮城野海岸平野は地理的要因や成因・地質などから地形区分がされており、南部の広瀬川と名取川の合流地点付近を郡山低地、広瀬川以北を霞ノ目低地、名取川以南を名取低地と呼んでいる。郡山遺跡は郡山低地東半の北寄りに位置している。

郡山遺跡の発掘調査は昭和55年から継続的に進められており、以下のことが明らかになっている。

・官衙は１度大きな建て替えがあった。（古い時期を「Ⅰ期官衙」、新しい時期を「Ⅱ期官衙」と呼ぶ。）

・Ⅰ期官衙は造営基準方向が真北から東に30～40°ふれており、材木列や溝跡により区画され、内部には官舎や

倉が集中していた。

・Ⅱ期官衙は造営基準方向が真北方向を取り、方四町（428m）Ⅱ期官衙・南方官衙・寺院西方建物群・寺院東方建物群等からなる。

・方四町Ⅱ期官衙の内部中央には四面廂付建物の他に、石敷や石組池等の稀な遺構がある。

・Ⅱ期官衙南方には同方向の寺が建っている。

・南方官衙には四面廂付建物をはじめ、本来官衙中枢に配置されるような大型の掘立柱建物群が存在している。

・官衙は7世紀中頃から8世紀初めまで、寺院は7世紀後半から8世紀中頃まで機能を維持していた。

などである。

広瀬川及び名取川周辺地域は郡山遺跡をはじめとした各時代の遺跡が数多く分布している。両河川合流地点付近を中心に代表的な遺跡を概観してみる。

旧石器時代　郡山遺跡の西に富沢遺跡がある。第30次調査では地表下3mの土層で約2万年前の後期旧石器時代の生活跡と当時の環境を伝える自然遺物が確認されている。焚火跡と考えられる炭のまとまりが発見され、周囲から100点以上の石器が出土し、ゲイマツなどの針葉樹や動物のフン等が確認されている。針葉樹を中心とした湿地帯が広がっていたものと考えられ、動物の越冬地・狩猟活動の場と推測されている。第30次調査区には現在「地底の森ミュージアム（正式名称は仙台市富沢遺跡保存館）」があり、遺跡の保存と活用を行っている。

縄文時代　名取川支流の笊川両岸には六反田・下ノ内浦・伊古田・山口・大野田等の遺跡群が連なっている。六反田遺跡では中期の住居跡群が確認され、下ノ内浦遺跡では後期の墓跡が数多く発見されている。大野田遺跡では後期の環状集石群が確認され、墓域と祭祀の場であったと考えられている。

弥生時代　南小泉・西台畑・富沢・高田B・中在家南遺跡などがある。南小泉遺跡は昭和のはじめ飛行場拡張工事の際に、西台畑遺跡は粘土採掘時に土器類が出土し知られた遺跡である。富沢遺跡は中期（枡形囲・十三塚式期）の水田跡が重層的に広範囲に渡って存在している。高田B遺跡・中在家南遺跡では河川跡から中期の土器と共に農具等の豊富な木製品が出土し、東北地方における弥生時代の生活を知るうえで重要な発見となっている。

古墳時代　遠見塚古墳・大野田古墳群・南小泉遺跡・中在家南遺跡などがある。遠見塚古墳は前期末から中期はじめの全長約110mの市内最大の前方後円墳である。割竹形木棺を伴っていたと考えられる粘土郷が2基確認され、管玉・小玉・竪櫛が出土している。大野田古墳群では現在まで30基以上の古墳が確認されている。円墳が大半を占め、前方後円墳が1基含まれている。古墳時代中期後半から後期にかけて築造されたものと考えられている。南小泉遺跡では古墳時代全般にわたる集落跡が各地点で確認されており、当時期の中心地域の一つと考えられる。中在家南遺跡では河川跡から土器群と共に多くの木製農具が出土している。

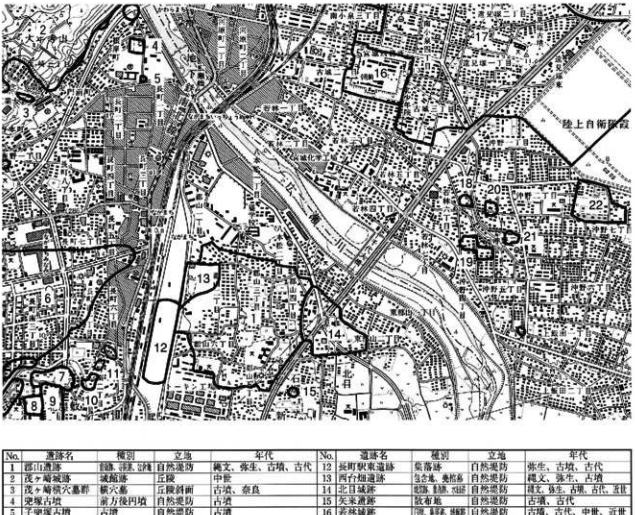
青葉山丘陵の東端部に大年寺山・愛宕山と呼ばれる丘陵地があり、その斜面に郡山遺跡に役所や寺院が営まれていた時代を中心に向山横穴墓群が造られていた。造営開始時期は6世紀末頃であるが、多くは7世紀後半から8世紀前半に集中している。向山横穴墓群は仙台平野最大の横穴墓群で200を超す横穴が存在していると考えられているが、副葬された土器の中に郡山1・Ⅱ期官衙出土遺物と共通した特徴が認められる土器類があり、官衙との関わりが考えられる。広瀬川を挟んで郡山遺跡東方約4kmの下飯田遺跡では集落跡が確認され、関東系の土師器が出土している。六反田遺跡では竪穴住居跡から上総型暗文土器が出土しており、南関東地方との関わりを示すものと考えられる。

奈良時代　郡山遺跡の北東に陸奥国分寺跡・陸奥国分尼寺跡・南小泉遺跡・神柵遺跡等がある。陸奥国分寺跡・陸奥国分尼寺跡は、聖武天皇の勅令によって天平13年（741）に全国に建立された寺々である。南小泉遺跡では奈良時代の集落跡が確認されており、国分寺の造営・維持に関係のある人々が住んでいた可能性もある。神柵遺跡は律令行政の末端の官衙施設の跡と考えられている。

平安時代　この時代になると各地域で集落跡が認められるが、郡山遺跡周辺では水田跡が形成されるのみで、人々の暮らした痕跡は減少する。南小泉遺跡の各地点では集落跡が確認されており、竪穴住居跡と共に掘立柱建物跡が併設され、石帯が出土する集落もあり、有力層の存在も窺われる。

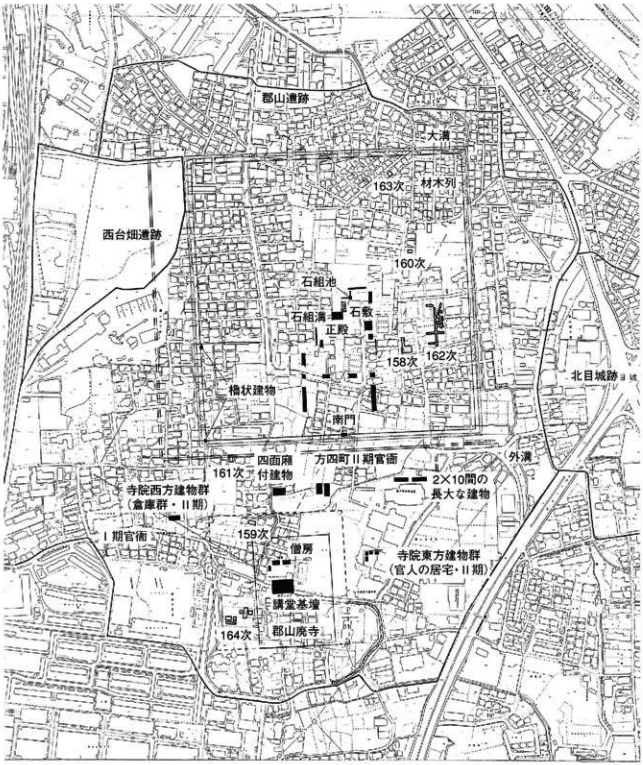
中　世　郡山遺跡の西に王ノ壇・富沢・高田Ｂ遺跡などがある。王ノ壇遺跡では一辺50m四方と考えられる堀跡に囲まれた鎌倉時代頃の武士層の屋敷跡が確認されている。屋敷内には数多くの建物跡の柱穴や井戸跡が発見され、多量の遺物が出土している。また、火葬墓等の各種の墓跡も検出され、信仰に関する遺構・遺物も発見されている。富沢・高田Ｂ遺跡では堀で区画された建物跡が複数検出され屋敷跡と考えられている。富沢遺跡では木簡や烏帽子状の漆製品が出土している。両遺跡では水田跡も発見されている。

近　世　郡山遺跡の東に隣接して北目城跡がある。戦国時代の天正年間（16世紀後半）までは粟野大膳の居城であったと言われ、その後伊達政宗が仙台城の完成まで居住したと伝えられている。複雑な構造の堀で囲まれた平城跡で、堀の底面には戦国時代特有の「障子」と呼ばれる障壁が築かれており、防御性に富んだ城館である事が確認されている。



No.	遺跡名	種別	立地	年代	No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	郡山遺跡	包蔵、集落、官衙	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代	12	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生、古墳、古代
2	茂ヶ崎城跡	城館跡	丘陵	中世	13	西台畑遺跡	包蔵地、集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳
3	茂ヶ崎横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳、奈良	14	北目城跡	館跡、包蔵、官衙	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、近世
4	発堀古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	15	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
5	子安塚古墳	古墳	自然堤防	古墳	16	若林城跡	館、屋敷、墓跡	自然堤防	古墳、古代、中世、近世
6	富沢遺跡	包蔵地、水田跡	後背湿地	縄文、弥生、古墳、古代、近世	17	南小泉遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	弥生、古墳、古代、中世、近世
7	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、古代、中世、近世	18	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古代
8	袋前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古代	19	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
9	大野田遺跡	祭祀、集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代	20	神柵遺跡	墓地、集落、包蔵地	自然堤防	古代
10	新田遺跡	散布地	自然堤防	古代	21	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生、古墳、古代
11	長町南遺跡	散布地	自然堤防	古代	22	泉好城跡	城館跡	自然堤防	中世

第１図　郡山遺跡と周辺の遺跡


郡山遺跡
大溝
163次
材木列
西台畑遺跡
160次
石組池
石敷
石組溝
正殿
162次
158次
北目城跡
櫓状建物
南門
外溝
方四町II期官衙
四面廂
付建物
161次
2×10間の
長大な建物
寺院西方建物群
（倉庫群・II期）
I期官衙
159次
僧房
寺院東方建物群
（官人の居宅・II期）
講堂基壇
164次
郡山廃寺

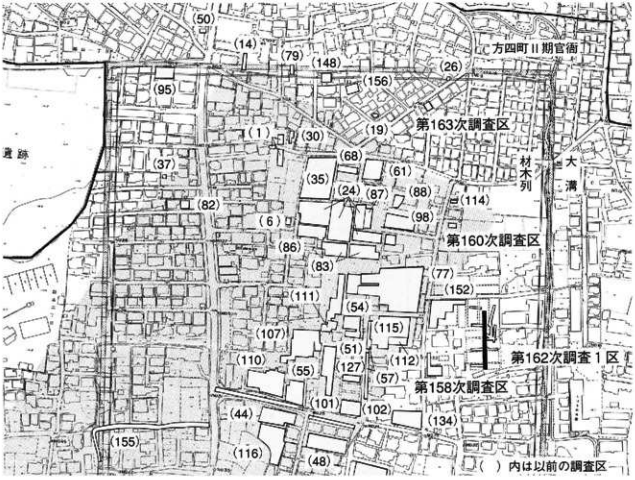
第2図　郡山遺跡全体図

Ⅲ　第162次調査１区

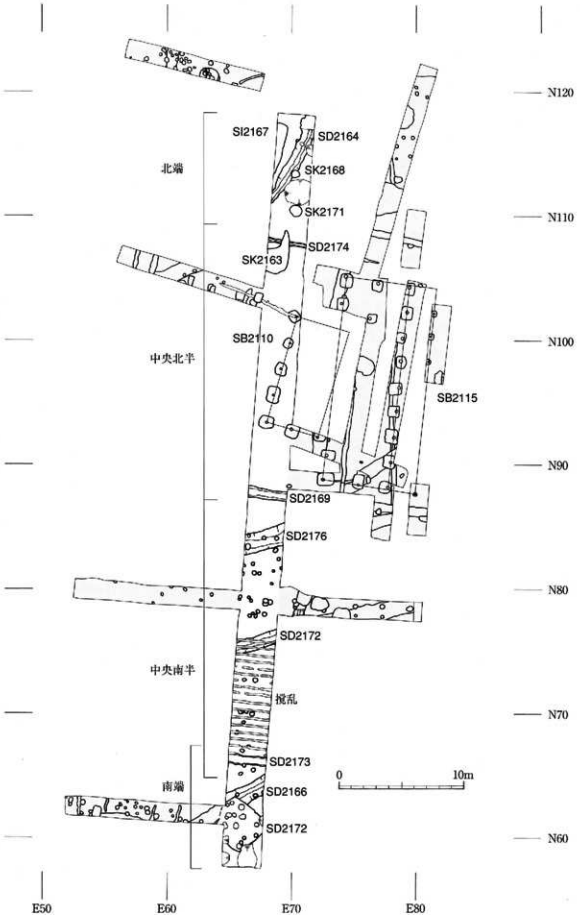
１．調査に至る経緯と調査方法

第162次調査は、仙台市太白区郡山三丁目24－８齋藤たりよ氏より、仙台市太白区郡山三丁目２－１外地内において宅地造成の計画が提出されたことを受けて実施した。道路建設部分約550㎡は私道（位置指定道路）であることから、下水道などの埋設工事により遺構が損なわれるためである。調査地は郡山遺跡のⅡ期官衙の東側中央部分に当たり、平成15年度調査の第152次調査区と平成16年度調査の第158次調査区の東側に近接している。この地区は、これまでの調査によりⅠ期官衙の東辺（材木列）より東にあたり、方四町Ⅱ期官衙内で何らかの官衙に関わる遺構が検出されることが予想された。

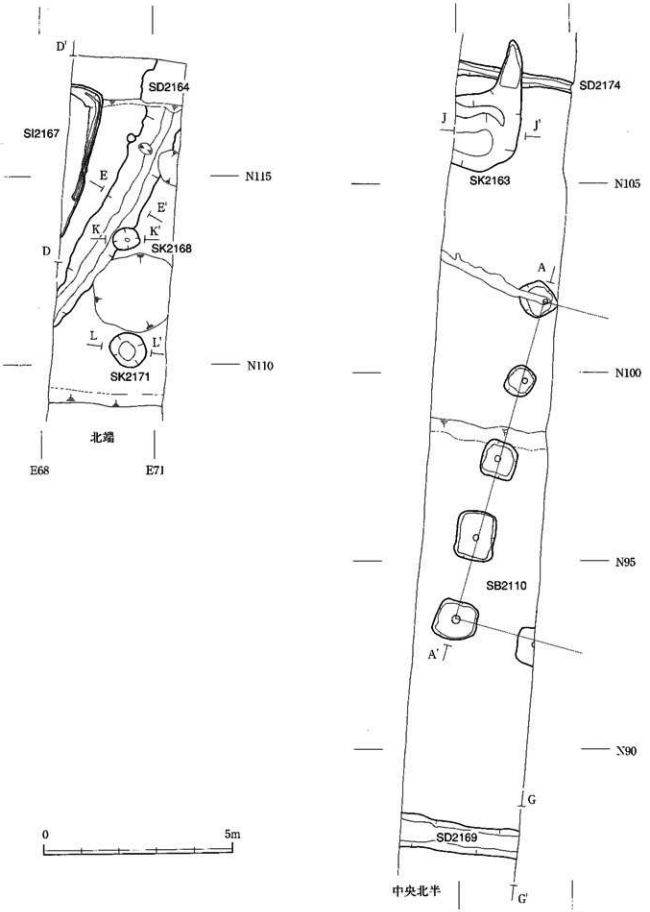
調査は道路建設部分を対象に東西３m、南北60mの調査区を設定し、平成16年７月28日に表土排除を行なった。現況より深さ50～60cm程で遺構を検出し、調査を８月27日まで行った。この調査区中央部で掘立柱建物跡を確認したため、その規模を明らかにするために国庫補助で毎年実施している「市内遺跡調査」による追加調査を実施した。その結果、さらに規模の大きい建物を検出し、調査ののち９月10日に終了した。受託で行った調査区を１区、国庫補助で行った調査区を２区とし、以下は１区についての報告である。２区については「仙台市文化財調査報告書第284集　郡山遺跡25」を参照されたい。



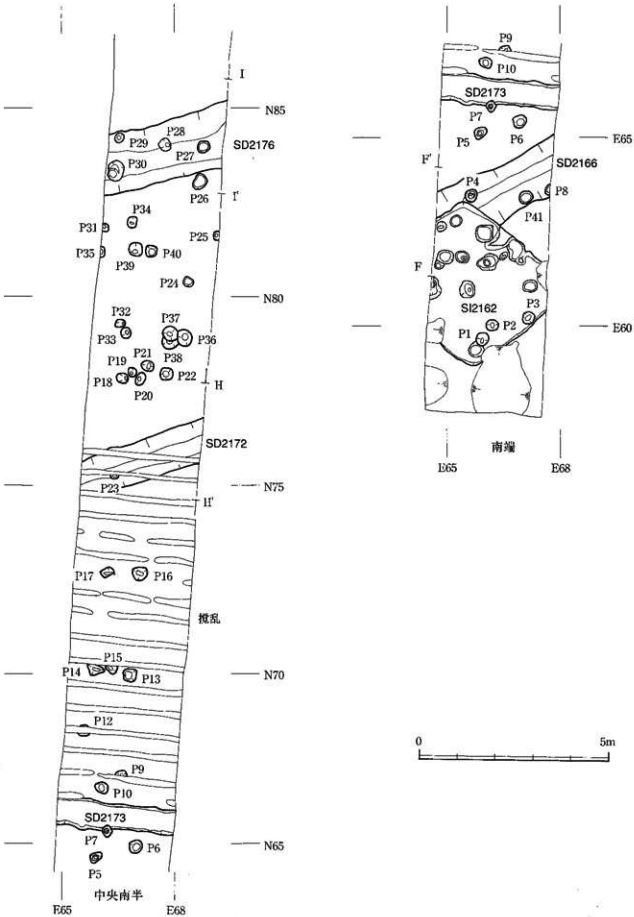
第３図　第162次調査１区位置図（1/4000）



第４図　第162次調査１区遺構配置図（1/300）　網かけ部は２区（拡張区）



第５図　第162次調査１区北端・中央北半平面図（1/100）



第６図　第162次調査１区中央南半・南端平面図（1/100）

２．基本層序

調査区で確認した基本層は大別して３層であるが、詳細に観察すると５層分の土層の堆積がある。

Ⅰａ層　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　現代の畑作耕作土、調査区全域で確認

Ⅰｂ層　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　現代の畑作耕作土、調査区中央部SD2176付近でのみ確認

Ⅱａ層　10YR3/3　暗褐色　シルト　旧畑作耕作土、調査区北端以外の全域で確認

Ⅱｂ層　10YR4/2　灰黄褐色　シルト　旧畑作耕作土、調査区南半でのみ確認

Ⅲ　層　10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト質粘土・粘土、遺構検出面

遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
基本層位	Ⅰａ	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	10YR3/1黒褐色シルトブロックを多量に含む。
	Ⅰｂ	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	
	Ⅱａ	10YR3/3　暗褐色	シルト	10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒を少量含む。
	Ⅱｂ	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック（径10mm）を少量含む。
	Ⅲ	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質粘土・粘土	

第１表　第162次調査１区基本層序

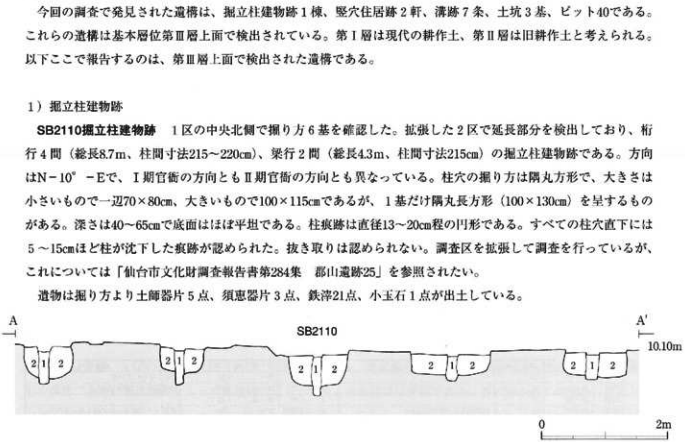
３．発見遺構と出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡１棟、竪穴住居跡２軒、溝跡７条、土坑３基、ピット40である。これらの遺構は基本層位第Ⅲ層上面で検出されている。第Ⅰ層は現代の耕作土、第Ⅱ層は旧耕作土と考えられる。以下ここで報告するのは、第Ⅲ層上面で検出された遺構である。

１）掘立柱建物跡

SB2110掘立柱建物跡　１区の中央北側で掘り方６基を確認した。拡張した２区で延長部分を検出しており、桁行４間（総長8.7m、柱間寸法215～220cm）、梁行２間（総長4.3m、柱間寸法215cm）の掘立柱建物跡である。方向はN－10°－Eで、Ⅰ期官衙の方向とⅡ期官衙の方向とも異なっている。柱穴の掘り方は隅丸方形で、大きさは小さいもので一辺70×80cm、大きいもので100×115cmであるが、１基だけ隅丸長方形（100×130cm）を呈するものがある。深さは40～65cmで底面はほぼ平坦である。柱痕跡は直径13～20cm程の円形である。すべての柱穴直下には５～15cmほど柱が沈下した痕跡が認められた。抜き取りは認められない。調査区を拡張して調査を行っているが、これについては「仙台市文化財調査報告書第284集　郡山遺跡25」を参照されたい。

遺物は掘り方より土師器片５点、須恵器片３点、鉄滓21点、小玉石１点が出土している。



遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
P1～P7まで共通				
柱痕跡	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルトブロックを微量に含む。
掘り方	2	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（径20～40mm）を多量に含む。

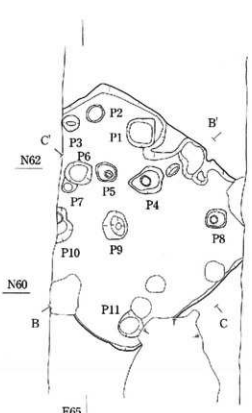
第７図　SB2110掘立柱建物跡断面図（1/60）

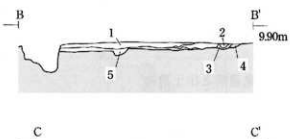
2）竪穴住居跡

SI2162竪穴住居跡　1区の南端で確認された、東西3.75m、南北3.4mの竪穴住居跡である。方向は北壁でE－33°－Sである。削平が著しく、床面までの深さは5cm程である。カマドの痕跡は北壁で確認されたが、ソデや天井部の構築土は残存せず、ソデの痕跡と焼面のみの検出である。床面までの堆積土は1層である。床面でピットが11検出されている。

遺物は堆積土中より土師器片159点、須恵器片9点、鉄滓26点、掘り方より土師器片5点が出土している。また、ピット中より土師器片12点、瓦1点、鉄滓3点が出土している。この内、図化することができたものは、堆積土中から出土した、頸部と体部の境の段が明瞭な土師器C－984甕（第12図2）と外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ調整された土師器C－985坏（第12図1）の2点である。

SD2166溝跡を切っている。





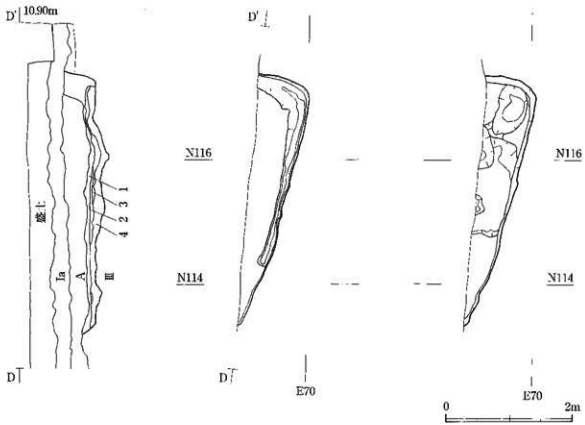
遺構名	層位	土色	土性	備考
SI2162	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	埋積土。焼土・木炭粒を含む。
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	流土ブロック（径5～10mm）多量。木炭粒少量。
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	流土ブロック（径5～10mm）微量。
	4	10YR3/2 黒褐色	シルト	流土ブロック（径5～10mm）少量。
	5	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	縁り潰部の上。10YR5/3褐色粘土質ソホトブロック（径30mm）を少量含む。

PitNo.	形	長×短（cm）	深さ（cm）	備考	PitNo.	形	長×短（cm）	深さ（cm）	備考
1	方形	48×44	15		7	円形	35×	12	P6に切られている。
2	円形	31×28	11		8	方形	35×30	23	柱痕跡あり（直径13cm）。
3	円形	28×26	17		9	円形	48×42	45	
4	円形	62×60	21	柱痕跡あり（直径16cm）。	10	不整形	57×	34	焼壁ぎわで検出。柱痕跡あり（直径20cm）。
5	円形	33×25	34	柱痕跡あり（直径14×11cm）。	11	円形	41×40	15	
6	円形	44×40	13	P7を切っている。					

第8図　SI2162竪穴住居跡（1/60）

SI2167竪穴住居跡　1区北端の西壁際で住居跡の北東コーナーを確認した。攪乱を受け残存状況は良好ではない。住居の方向は東壁でN－9°－Eである。全体規模は不明であるが、調査区の壁面で住居南壁の立ち上がりを確認できるため、南北で4m前後と考えられる。床面までの深さは検出面より35cm～50cmである。床面上の北・東壁ぎわには周溝状の落ち込みが見られる。床面までの堆積土は2層である。柱穴は確認することができなかった。

遺物は堆積土中から土師器片14点、鉄滓３点、貼床直下の堀り方からハケメ調整のある甕や内面黒色処理された坏等の土師器片７点、鉄滓３点が出土している。



遺構名	層位	十　色	土　性	備　考
基本層位	Ⅱa	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR3/1黒褐色シルトブロックを多量に含む、Aとの境に10YR4/1褐灰色のブロックを層状に含む所がある。
	Ⅲ	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	
A		10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	縦乱。10YR4/4褐色砂質シルトブロックを含む。
SI2167	1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	焼土粒を少量含む、下層（2、3層）の土を含む、住居の埋戻し土。
	2	10YR3/4 にぶい黄褐色	粘土	10YR3/1黒褐色粘土のブロックを含む、上下の層に接する層が撹乱している、住居の貼床。
	3	10YR4/4 褐色	粘土	10YR2/1黒色粘土のブロックを含む、焼土粒を極少量含む。
	4	10YR4/6 褐色	粘土	炭化物を多量に含む、焼土粒を少量含む。

第９図　SI2167　竪穴住居跡（1/60）

３）溝跡

SD2164溝跡　１区の北端で検出された。上幅60～100cm、底面幅20～35cm、深さ40～60cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁は傾斜をもって直線的に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。西に向かって緩やかに湾曲しており、方向はおおむねＮ－24°－Ｅで、検出した総長は7.7mである。堆積土は４層である。

遺物は土師器片が４点出土している。

SK2168土坑に切られている。

SD2166溝跡　１区の南端で検出された。上幅120～150cm、底面幅25～40cm、深さ27～53cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁は傾斜を持って緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はＥ－34°－Ｎで、検出した総長は3.5mである。堆積土は３層である。

遺物は出土していない。

SI2162竪穴住居跡に切られている。

SD2169溝跡　1区のほぼ中央を東西に横断するように検出された。上幅70～90cm、底面幅30～55cm、深さ20～30cm程で、断面形は扁平なU字型の溝跡である。壁は傾斜を持って立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はE－1°－Sで、検出した総長は3.1mである。堆積土は1層である。

遺物は土師器片111点、須恵器片10点、鉄滓43点、小玉石1点が出土している。

SD2172溝跡　1区の中央南側で検出された。上幅90～110cm、底面幅25～40cm、深さ40～48cm程で、断面形は逆台形である。壁は傾斜を持って立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はE－24°－Nで、検出した総長は3.4mである。堆積土は3層である。第162次調査の西側で実施した第158次調査のSD2143溝跡と方向・規模・断面形・堆積土に共通点がみられるため、延長部分の可能性がある。

遺物は土師器片が1点出土している。

P23に切られている。

SD2173溝跡　1区の南側を東西に横断するように検出された。上幅65～80cm、底面幅50～60cm、深さ4～10cm程で、断面形は扁平なU字形の溝跡である。壁は傾斜を持って立ち上がり、底面は一部に凹凸が著しい箇所がある。方向はE－0°－S（真東西）で、検出した総長は3.0mである。堆積土は1層である。

遺物は土師器片が5点出土している。

SD2174溝跡　1区の北側を東西に横断するように検出された。上幅30～40cm、底面幅10～20cm、深さ9～14cm程で、断面形は扁平なU字形の溝跡である。壁は傾斜を持って緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はE－4°－Sで、検出した総長は3.1mである。堆積土は1層である。

遺物は出土していない。

SK2163土坑に切られている。

SD2176溝跡　1区の中央やや南側で検出された。上幅150～165cm、底面幅50～70cm、深さ47～62cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁は傾斜を持って立ち上がり、北壁に平坦な段を有する。底面はほぼ平坦である。方向はE－20°－Nで、検出した総長は3.3mである。堆積土は6層である。

遺物は出土していない。

P26～30に切られている。

4）土坑

SK2163土坑　1区の北側、調査区の西壁ぎわで検出した。東西1.7m以上、南北1.7～3.2mの土坑で、北東部に北に向けて溝状に張り出した部分が見られる。深さは2～53cm程である。壁は傾斜を持って緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は4層である。

遺物は土師器片32点、須恵器片1点、鉄滓1点が出土しており、図化できたものは体部外面に明瞭な段を有する土師器のC－986坏（第12図3）が1点である。

SD2174溝跡を切っている。

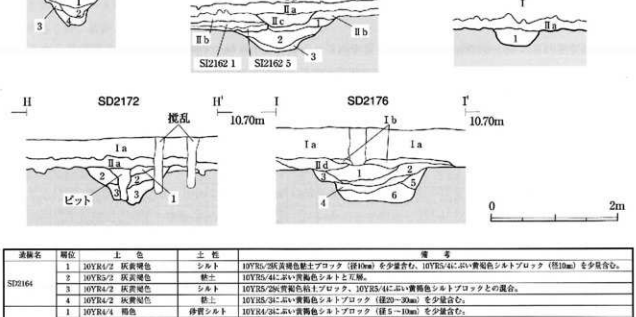
SK2168土坑　1区の北端で検出した。東西0.7m、南北0.6mの土坑で、深さ35cm程である。壁は傾斜を持って緩やかに立ち上がり、底面は一部に凹凸が著しい箇所がある。堆積土は1層である。

遺物は土師器片が19点出土しており、図化できたものは土師器のC－987坏（第12図4）が1点である。

SD2164溝跡を切っている。

SK2171土坑　1区の北端で検出した。東西1m、南北0.9mの土坑で、深さ10cm程である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層である。

遺物は土師器片1点、磁器片1点、鉄滓1点が出土している。



遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
SD2164	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色粘土ブロック（径10cm）を少量含む。10YR5/4に赤い黄褐色シルトブロック（径10cm）を少量含む。
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	10YR5/4に赤い黄褐色シルトと互層。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色粘土ブロック、10YR5/4に赤い黄褐色シルトブロックとの混合。
	4	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	10YR5/3に赤い黄褐色シルトブロック（径20～30cm）を少量含む。
SD2166	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	10YR4/3に赤い黄褐色シルトブロック（径5～10cm）を少量含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	10YR4/2灰黄褐色粘土と混合。
	3	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土	10YR4/3に赤い黄褐色粘土と混合。
SD2169	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	炭化ブロック（径10～20cm）を少量含む。崩土部に礫を多量に含む。
SD2172	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	10YR4/2灰黄褐色シルトブロック（径5cm）を多量に含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR3/3暗褐色シルトブロック（径5～10cm）を多量に含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	10YR5/2灰黄褐色粘土ブロック（径10cm）を微量に含む。10YR3/3黒褐色粘土ブロック（径10cm）を微量に含む。
SD2176	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR4/3に赤い黄褐色粘土ブロック（径10cm）を少量含む。
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	層下部に10YR3/1黒褐色粘土の層（3cm前後と薄い）あり。
	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	10YR4/3に赤い黄褐色シルトとの混合。
	4	10YR4/3 にぶい黄褐色	細砂	10YR5/3に赤い黄褐色シルトと互層。
	5	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	10YR5/3に赤い黄褐色粘土との混合。
	6	2.5Y5/3 黄褐色	粘土	10YR5/3に赤い黄褐色粘土との混合、砂粒を少量含む。
基本層位	Ⅰa	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR3/1黒褐色シルトブロックを多量に含む。
	Ⅰb	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	
SZ2162	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	埋積土。
	5	10YR6/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	掘り方埋め土。
Ⅱc		10YR5/3 暗褐色	シルト	10YR4/4褐色粘土ブロック（径5～10cm）を少量含む。　別の遺構の一部か？
Ⅱd		10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR3/3暗褐色シルトブロック（径5cm）を多量に含む。　別の遺構の一部か？

第10図　第162次調査１区溝跡断面図（1/60）

遺構名	層位	土色	土性	備考
SK2163	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	10YR3/4に赤い黄褐色シルトブロック（径5～10cm）を少量含む。
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	10YR3/4に赤い黄褐色シルトブロック（径10～20cm）を多量に含む。木炭粒を微量含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	10YR3/4に赤い黄褐色シルトブロック（径5cm）を少量含む。
	4	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	10YR3/3暗褐色粘土ブロックとの混合。
SK2168	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	木炭粒を微量含む。
SK2171	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を斑状に多量に含む。

第11図　第162次調査１区土坑断面図（1/60）

5）ピット

ピットは調査区の南半で40検出されている。調査区の北半ではピットを検出することができなかった。調査区の南半に比べ北半の方が深くまで削平されているためと推測される。

遺物は土師器片が大半を占める。

中央部で検出されているP26～30、37は、２区でのピットの配置と合わせて検討すれば掘立柱建物跡となる可能性がある。時期は不明であるが、柱穴の掘り方の規模が小さく古代まではさかのぼらない遺構であろうと推測される。

PitNo.	形	長×短（cm）	深さ（cm）	備考	PitNo.	形	長×短（cm）	深さ（cm）	備考
1	円形	32×30	56	SX2426を切っている。柱痕跡あり（直径13cm）。土師器1点出土。	23	楕円形	24×20		
2	円形	30×29	27	SX2162を切っている。柱痕跡あり（直径18cm）。	24	方形	24×20	53	柱痕跡あり（直径10cm）。土師器片1点、須恵器片1点出土。
3	楕円形	35×29	22	SX2426を切っている。柱痕跡あり（直径16cm）。土師器4点出土。	25	方形	26×	17	底抜きわで検出。柱痕跡あり（直径11cm）。
4	円形	32×31	40	SX2166を切っている。土師器片1点出土。	26	楕円形	44×36	49	柱痕あり（直径20cm）。埋土中に炭化物を含むため建物跡の可能性がある。
5	不整形	33×25	44	土師器片1点、須恵器片1点出土。	27	円形	33×32	11	柱痕あり（直径12cm）。埋土中に炭化物を含むため建物跡の可能性がある。
6	円形	35×31	18	土師器片1点出土。	28	楕円形	36×33	21	柱痕跡あり（直径12cm）。土師器片1点出土。
7	楕円形	30×25	30	土師器片1点出土。					埋土中に炭化物を含むため建物跡の可能性がある。
8	（円形）	30×	(13)	底抜きわで検出。	29	円形	28×25	27	柱痕あり（直径12cm）。埋土中に炭化物を含むため建物跡の可能性がある。
9	楕円形	36×23	36	土師器片2点出土。	30	楕円形	52×40		柱痕あり（直径20cm）。埋土中に炭化物を含むため建物跡の可能性がある。
10	楕円形	37×28	38	土師器片3点出土。	31	円形	21×	33	西隅きわで検出。柱痕跡あり（直径9cm）。
11	欠番				32	方形	24×22	27	
12	方形	29×26	30		33	円形	29×26	28	土師器片1点出土。
13	方形	36×35	39	土師器片1点出土。	34	楕円形	31×24	26	
14	不整形	46×33	28		35	方形	27×	24	西隅きわで検出。
15	方形	34×32	31		36	円形	45×37	38	P37・P38を切っている。土師器片1点出土。
16	円形	41×37	25		37	円形	40×37	49	P36に切られ、P38を切っている。
17	方形	36×24	30						埋土中に炭化物を含むため建物跡の可能性がある。
18	円形	32×29	29		38	円形	44×	40	P36・P37に切られている。土師器片1点出土。
19	円形	27×25	26		39	円形	35×33	39	
20	楕円形	37×26	56		40	円形	32×30	35	
21	円形	34×29	18		41	円形	37×35	20	土師器片2点、弥生1点出土。
22	円形	36×35	21						

第２表　第162次調査１区ピット観察表

図中番号	巻図番号	遺構	器種	出土地点 出土遺構	出土地点 層位	遺存度	法量（cm） 器高・長	法量（cm） 口径・幅	法量（cm） 底径・厚	外面調整	内面調整	備考	写真図版
1	C486	土師器	坏	SX2162	1	3/4	5.1	14.2 −14.4		口縁部ヨコナデ後ナデ 体部ヘラケズリ 底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ後ナデ 体部ヨコナデ後ナデ、ヘラミガキ 底部ナデ後ヘラミガキ	底部外面に ヘラ記号	4－23
2	C984	赤ロクロ 土師器	甕	SX2162	1	口縁部 小片	8.7			口縁部ヨコナデ 体部ハケメ	口縁部ヨコナデ 体部ナデ		4－24
3	C486	土師器	坏	SX2162		1/4	3.5	14.6	11.2	口縁部ヨコナデ後ナデ 体部ヨコナデ後ナデ 底部ヘラケズリ後ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ 体部ヘラナデ後ヘラミガキ 底部ヘラナデ後ヘラミガキ	内面黒色処理？ 輪積み痕	4－25
4	C987	土師器	坏	SX2168	1	2/3	4.4	8.1		口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ	内面黒色処理	4－26

第12図　第162次調査１区出土遺物（1/3）

４．まとめ

第162次調査区は平成15年度の第152次調査区と平成16年度の第158次調査区の東側に位置し、郡山遺跡の中央部やや東側、方四町Ⅱ期官衙内の東部にあたる地点である。今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡１棟、竪穴住居跡２軒、溝跡７条、土坑３基、ピット40などである。

調査区の北寄りで検出されたSB2110掘立柱建物跡は、Ⅰ期官衙においては中枢部の外側にあたる東辺材木列（SA2055）から約44m離れている。方四町Ⅱ期官衙では中枢部を構成するSB1680掘立柱建物跡（註１）と外郭東辺となるSA1530材木列（註２）のほぼ中間の位置にあたる。しかし、このSB2110はⅠ期・Ⅱ期官衙のいずれの方向とも異なっており、官衙の時期の建物に含められるかについては検討を要する。周辺でこのような建物跡が存在するかどうかについては、方四町Ⅱ期官衙内で今回の調査区より南方の第134次調査区においてSB1925、1930、1935掘立柱建物跡の３棟が真北より５°～８°東に振れる状況で検出されていた。（註３）。特にこの３棟で重複関係から最も古いSB1930は、柱穴掘り方中に10世紀前半代に降下した灰白色火山灰が含まれている。第134次調査では官衙廃絶後にやや時期を隔てた屋敷などの建物が存在していたことを想定しておいた。今回の調査におけるSB2110が同様の時期になるかは明らかではないが、別地点で官衙の時期とは異なる掘立柱建物が存在していることから、Ⅰ期・Ⅱ期官衙のいずれに属するかに必ずしもこだわる必要はないであろう。今回宅地となり、この地区でSB2110と同様の建物に視点を置いた追加調査を早速実施する状況にはないが、官衙以外の別時期の建物ととらえ、課題として位置付けておきたい。

この他に、発見された竪穴住居跡のうちSI2162竪穴住居跡は、Ⅰ期官衙中枢部の外側正面にあたり、道路遺構などが想定される地点で検出された。今回の調査区が狭小なため、それらの遺構は検出されていないが、この地点にⅠ期官衙中枢部の遺構と同じくＮ－33°－Ｅ方向に規制された竪穴住居が存在したことは、Ⅰ期官衙の周囲を含めた構造を考える上で重要であろう。

註１　仙台市文化財調査報告書第227集「郡山遺跡Ⅹ－平成９年度発掘調査概報－」1998.3
　　第115次発掘調査P.9

註２　仙台市文化財調査報告書第194集「郡山遺跡ⅩⅤ－平成６年度発掘調査概報－」1995.3
　　第105次発掘調査P.40

註３　仙台市文化財調査報告書第250集「郡山遺跡21－平成12年度発掘調査概報－」2001.3
　　第134次発掘調査P.22

当時報告した方位に誤りがありここで訂正する。SB1925はＮ－８°－Ｅ、SB1930はＮ－３°－Ｅ、SB1935はＮ－７°－Ｅである。

参考文献

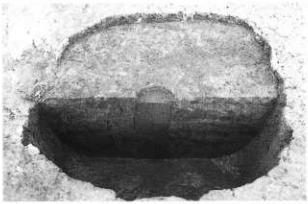
「郡山遺跡　第152次発掘調査」「郡山遺跡24－平成15年度発掘調査概報－」仙台市文化財調査報告書第269集　2004.3

1　第162次調査１区全景（北より）

2　第162次調査１区全景（南より）

図版１　第162次調査１区調査区全景

3　SB2110掘立柱建物跡確認状況（南より）



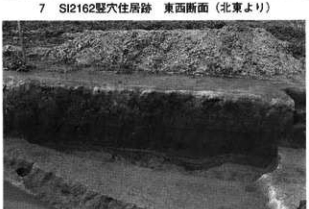
4　SB2110掘立柱建物跡　N3E3断面（西より）

5　SB2110掘立柱建物跡　N3E3（西より）

6　SB2110掘立柱建物跡　N5E2確認状況（西より）

7　SI2162竪穴住居跡　東西断面（北東より）

8　SI2162竪穴住居跡（南西より）



9　SI2169竪穴住居跡断面（東より）

10　SI2169竪穴住居跡（北より）

図版２　第162次調査１区掘立柱建物跡・竪穴住居跡

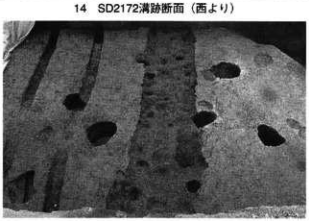
11　SD2164溝跡断面（南より）

12　SD2166溝跡断面（東より）

13　SD2166溝跡（南西より）

14　SD2172溝跡断面（西より）

15　SD2172溝跡（西より）



16　SD2173溝跡（西より）

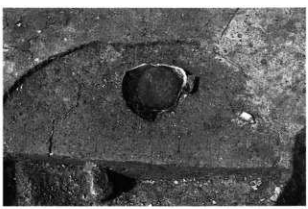
17　SD2176溝跡断面（西より）

18　SD2176溝跡（西より）

図版3　第162次調査1区溝跡

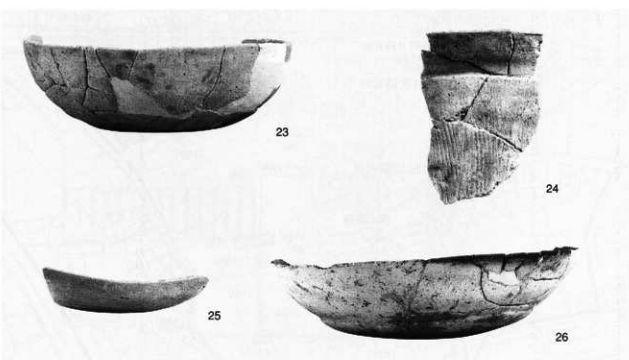
19　SK2163土坑断面（南より）

20　SK2163土坑（南より）



21　SK2168土坑遺物出土状況（南より）

22　SK2168土坑（南より）



23　C－985坏　SI2162（第12図１）　　24　C－984壺　SI2162（第12図2）

25　C－986坏　SK2163（第12図３）　　26　C－987坏　SK2168（第12図４）

図版４　第162次調査１区土坑・出土遺物

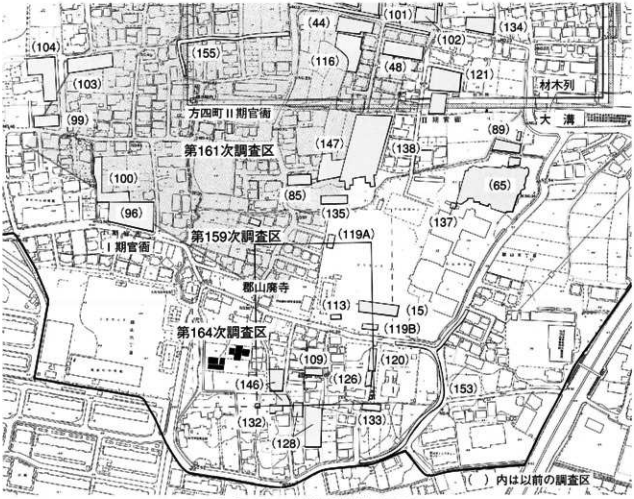
Ⅳ　第164次調査

1．調査に至る経緯と調査方法

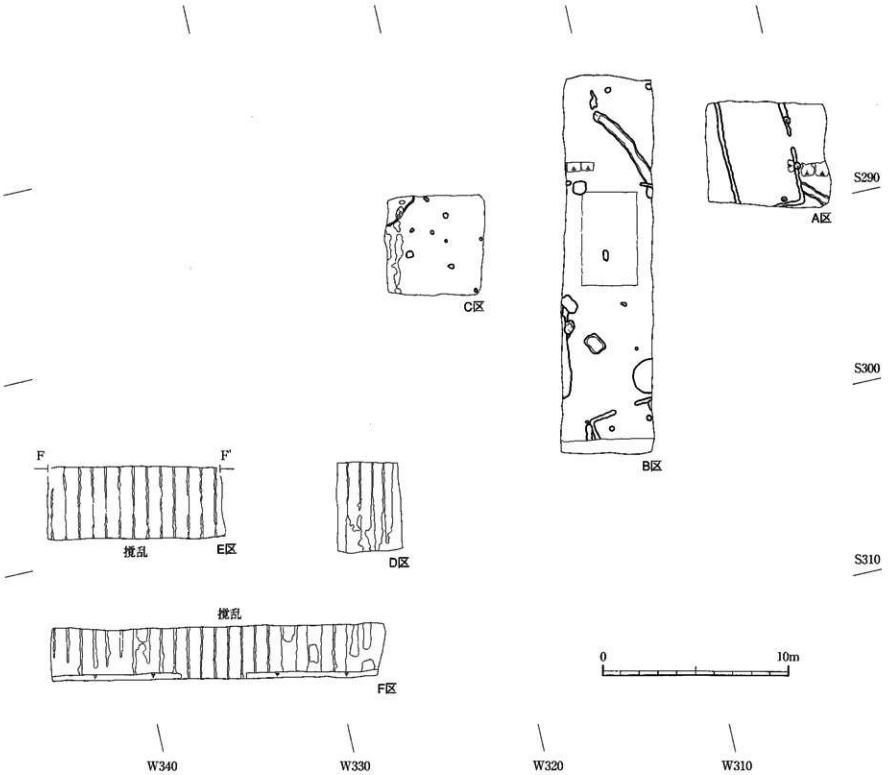
第164次調査は、仙台市太白区郡山二丁目11－17庄子善範氏・庄子はるの氏より、仙台市太白区郡山五丁目144－1及び144－8において一般住宅地造成工事の計画が提出されたことを受けて実施した。造成工事の行われる敷地面積2591.52㎡中、埋設管等の設置が予想される道路箇所と基礎構造が深い宅地部分を調査対象とした。調査地は郡山遺跡の南側にあたり、郡山廃寺の西に隣接している地点である。

この地点では、これまで昭和62年（1987）の第70次調査、平成15年（2003）の第154次調査の２回調査が実施されている。第70次調査では一本柱列１列、材木列１列、掘立柱建物跡１棟、竪穴住居跡８軒、溝跡５条、井戸跡１基、土坑21基、不明遺構３基、小柱穴・ピット106等を検出している。遺構は第70次調査区の東半に集中しており、この内、一本柱列と材木列等は郡山廃寺の西辺と考えられた遺構である。第154次調査では宅地造成計画に伴う道路部分の調査を実施しているが、ピット数基を確認したのみである。

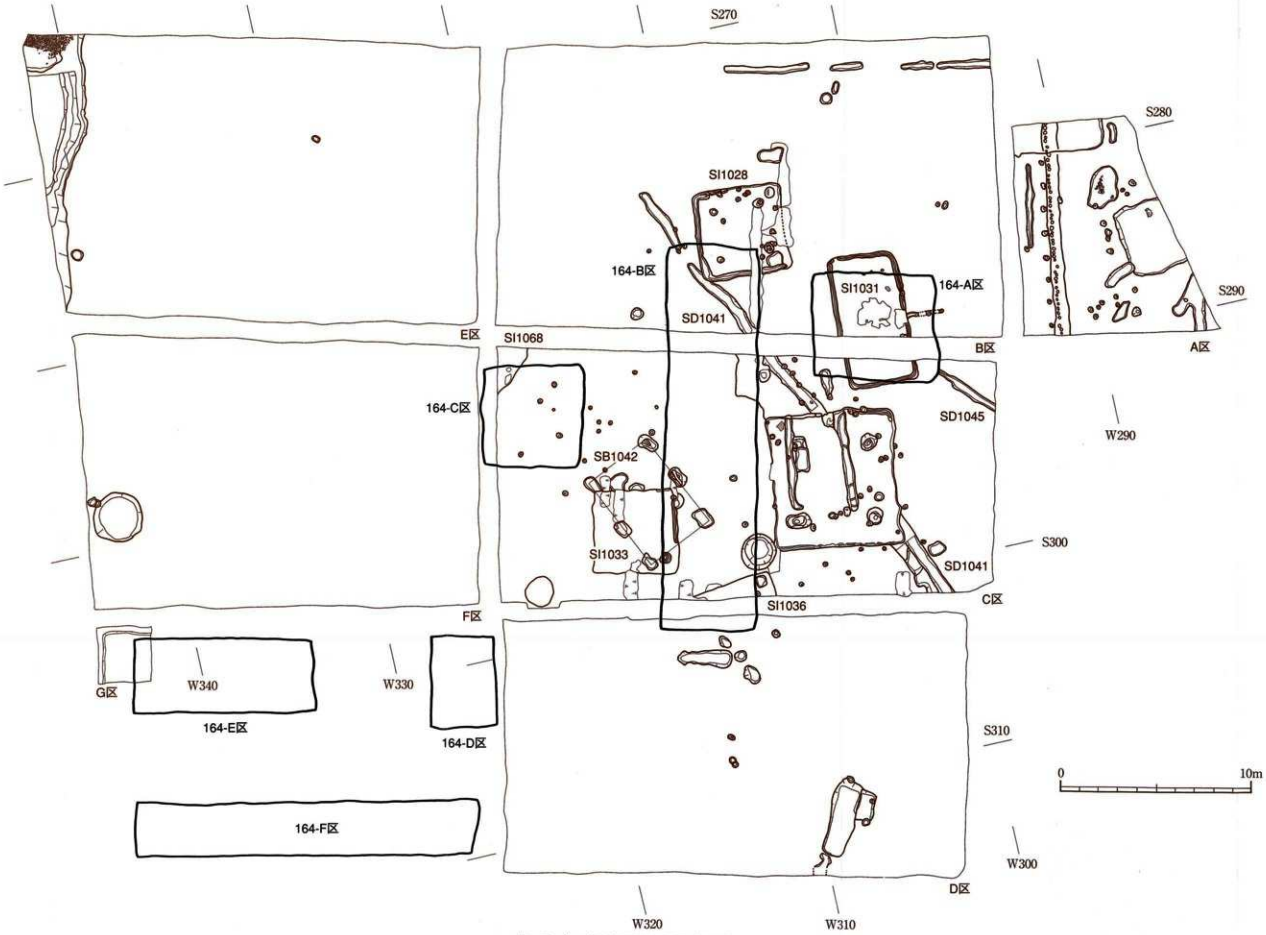
今回の第164次調査は、工事計画の変更に伴い、これまでに検出されている住居跡や掘立柱建物跡等の遺構の追加調査と、部分的ではあるが調査されなかった箇所での発掘調査を目的として実施した。Ａ～Ｆ区の６つの調査区を設定し、調査面積は約280㎡である。調査終了後Ｂ・Ｃ区で下層調査を行った。調査は平成16年10月12日に開始し、11月２日に終了した。



第13図　第164次調査区位置図（1/4000）



第14図　第164次調査区遺構配置図（1/200）

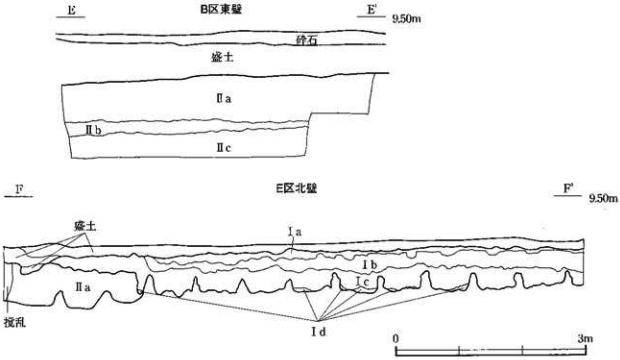


第15図　第70次調査区遺構配置図（1/200）

2．基本層序

調査区で確認した基本層は大別して2層であるが、詳細に観察すると7層分の上層の堆積がある。なお、A～C区は第70次調査区と重なっているため、Ⅱ層より上層は削平されている。

Ⅰa層	10YR4/4	褐色	シルト	D～F区で確認した。畑作耕作土。
Ⅰb層	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	D～F区で確認した。天地返し。
Ⅰc層	10YR4/4	褐色	砂質シルト	D～F区で確認した。天地返し。
Ⅰd層	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	D～F区で確認した。天地返し。
Ⅱa層	10YR4/4	褐色	シルト	E区北壁では10YR6/3にぶい黄褐色。
Ⅱb層	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	全体に西に向かってなだらかに下がっている。
Ⅱc層	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	



遺構名	層位	上色	土性	備考
基本層序	Ⅰa	10YR4/4 褐色	シルト	Ⅰb層のブロックを多々。
	Ⅰb	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR4/4褐色シルトブロックを多量に含む。
	Ⅰc	10YR4/4 褐色	砂質シルト	下層25YR5/8オリーブ褐色に変色、10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルトブロックを含む。
	Ⅰd	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む。
	Ⅱa	10YR4/4 褐色	シルト	E区北壁では10YR6/3にぶい黄橙色砂質シルト。 下層調査区ではこの層の上に酸化鉄の層が見られる。酸化鉄の層の上にマンガン層が見られる。
	Ⅱb	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂	層上部に酸化鉄が多く見られる。調査区全域に広がっており、西に向かってなだらかに下がっている。
	Ⅱc	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	全体に酸化鉄を含む。

第16図　第164次調査B区東壁断面図・E区北壁断面図（1/60）

3．発見遺構と出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡4軒、溝跡2条である。これらの遺構は基本層位第Ⅱ層上面で検出されている。第Ⅰ層は現代の耕作土である。以下、調査区毎に検出した遺構について報告する。

1）A区

敷地の北東に設定した調査区である。第70次調査区のB・C区の一部と重複している。調査区全域が耕作による削平を受けているが、特に北半が著しい。調査区の中央部でSI1031竪穴住居跡、南東部でSD1045溝跡を確認した。

SI1031竪穴住居跡　A区の中央で確認した。第70次調査では周溝と煙道の調査を行っているが、床面までの検出であったため、今回の調査ではその下層の掘り方底面までの調査を行った。東西3.6m、南北5.5m以上の南北に長い竪穴住居跡である。方向は東壁でN－5°－Wである。カマドを確認することはできなかったが、住居床面の中央部に炭化物の混合した層が見られた。掘り方の埋土は1層で、厚さは3～20cmである。床面で柱穴の可能性がある5基のピットを検出した。P1・P2は東壁の周溝上にあり、煙道を挟んでほぼ対称の位置にある。P4、P5は住居中央部の炭化物下で検出した。

遺物は掘り方より土師器片16点、須恵器片1点が出土している。

SD1045溝跡を切っている。

SD1045溝跡　A区の南東隅で検出した。第70次調査でも検出され、第164次調査ではその延長部を確認した。上幅35～45cm、底面幅20～35cm、深さ8cm程で、断面形は扁平なU字形の溝跡である。壁は傾斜を持って緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はE－37°－Sで、検出した総長は1.7mである。堆積土は1層である。

遺物は出土していない。

SI1031竪穴住居跡に切られている。

2）B区

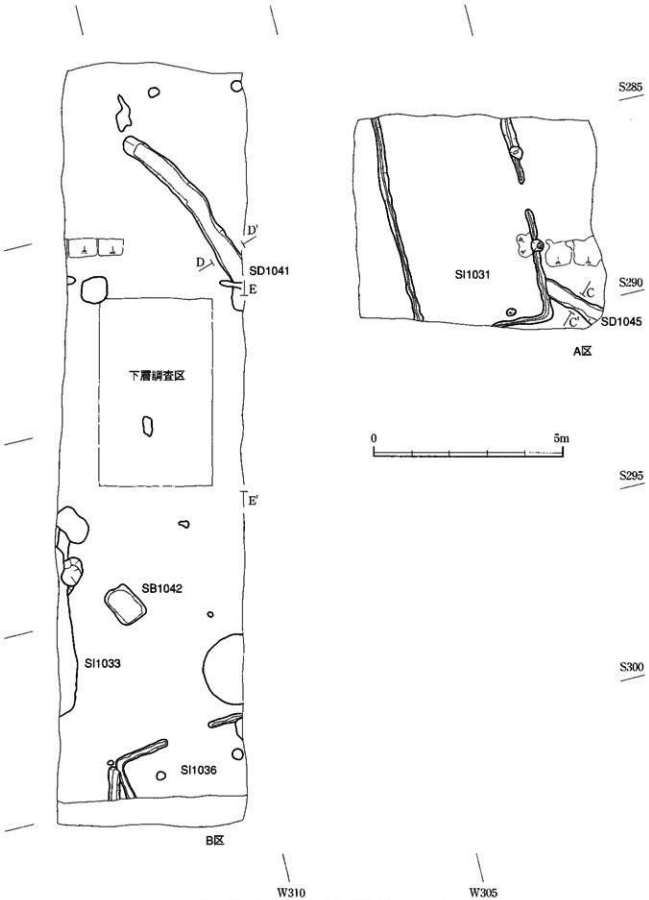
敷地の東側に設定した調査区である。第70次調査区のB・C区の一部と重複している。調査区全域が耕作による削平を受けているが、特に北端が著しく南側に比べ30～40cm低くなっている。SB1042掘立柱建物跡、SI1033、1036竪穴住居跡、SD1041溝跡を確認している。調査終了後、調査区中央で下層調査を行っている。南北5m×東西3mの調査区を設定し、現地表面から2mまで掘り下げて調査を終了した。以下第164次調査で調査した遺構について報告するが、SB1042、SI1033については第70次調査区で調査をすべて終了しており、今回は同一箇所での重複した調査となった。なお第70次調査で検出されていたSI1028竪穴住居跡は、削平を受け今回は検出することはできなかった。

SI1036竪穴住居跡　第70次調査では北東コーナーを検出している。第164次調査ではB区の南端で住居跡の北壁及び西壁の一部を検出した。残存状況は良好ではなく、周溝のみの検出である。住居の方向は北壁でE－14°－Nである。全体の規模は不明であるが、北辺長3.6m以上、西辺長1.1m以上である。住居の北壁～西壁部分で幅15～20cm、深さ2～12cmの周溝を確認している。周溝は北壁のほぼ中央で途切れており、床面にかすかに焼土が見られたが、残存状況が良好でなくカマドの痕跡かどうかは不明である。柱穴を確認することはできなかった。

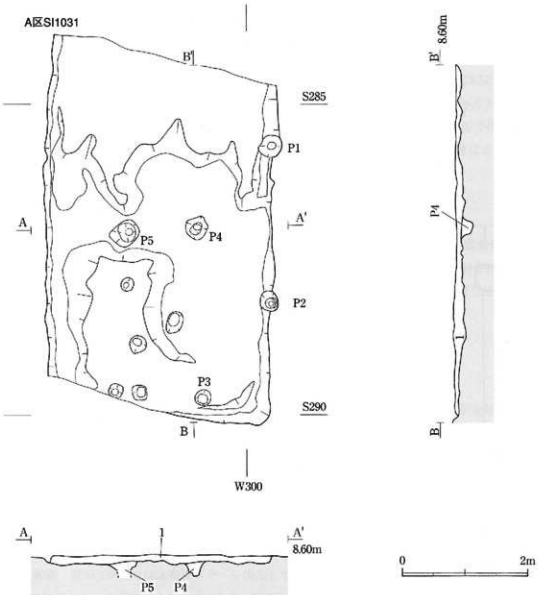
遺物は出土していない。

SD1041溝跡　第164次調査では第70次調査区で調査されなかったB区とC区の調査区境の部分を検出した。上幅55cm、底面幅45cm、深さ15cm程で、断面形は扁平なU字形の溝跡である。壁は傾斜を持って緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。西に向かって緩やかに湾曲しており、方向はおおむねN－34°－Wで、検出した総長は4.8mである。堆積土は2層である。

遺物は出土していない。



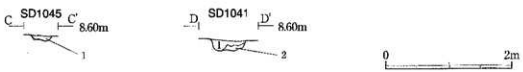
第17図　第164次調査A区・B区平面図（1/100）



遺構名	層位	土色	土性	備考
SI1031	1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	10YR3/4暗褐色砂質シルト・10YR5/4にぶい黄褐色粘土のブロックを含む。住居の中央部に炭化物を含む。 端6cm岩の破片を少量含む。掘り方埋め土。
ピット		10YR3/3 暗褐色	シルト	10YR5/4にぶい黄褐色シルトを含む。

Pit No.	形	長×短 (cm)	深さ (cm)	備考
1	円形	40×35	48	SI1031の東側周溝を切っている。
2	円形	34×30	58	SI1031の東側周溝を切っている。
3	円形	37×36	19	
4	円形	36×36	24	SI1031床面の炭化物の下で検出。
5	方形	50×40		SI1031床面の炭化物の下で検出。埋土あり（深41cm）。

第18図　SI1031竪穴住居跡堀り方（1/60）



遺構名	層位	土色	土性	備考
SD1045	1	10YR4/4 褐色	シルト	10YR3/3暗褐色シルトのブロックを含む。
SD1041	1	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	10YR6/3に赤い黄橙色シルト質粘土のブロック（径20～30mm）を少量含む。
	2	10YR6/3 にぶい黄橙色 10YR4/4 褐色	シルト質粘土 シルト質粘土	の混合層

第19図　第164次調査区溝跡断面図（1/60）

3）C区

敷地の中央北側に設定した調査区である。第70次調査区のC区の一部と重複している。調査区全域が耕作による削平を受けている。調査区北西部のSI1068竪穴住居跡については第70次調査で調査をすべて終了しており、今回は同一箇所の調査であった。調査区の中央部で下層調査を実施している。遺物は出土していない。

4）D区

敷地の中央南側に設定した調査区である。第70次調査区との重複はない。調査区全体が耕作による削平を受けており、現地表面より70cm程の深さまで及んでいる。遺構を確認することはできなかった。

遺物はⅠ層から土師器が1点出土したのみである。

5）E区

敷地の西端のやや南側に設定した調査区である。第70次調査区との重複はない。D区同様に調査区全体が耕作による削平を受けており、現地表面より70cm程の深さまで及んでいる。遺構を確認することはできなかった。

遺物はⅠ層より、土師器片が10点、須恵器片が1点、磁器片が1点、鉄滓が2点、鉄製品が1点出土している。

また、Ⅰa層は第70次調査区のG区のⅠ層に、Ⅰc層は同じくⅣ層に、Ⅲa層はⅥ層に対応すると考えられる。

6）F区

敷地の南西部に設定した調査区である。第70次調査区との重複はない。D区同様に調査区全体が耕作による削平を受けており、現地表面より70cm程の深さまで及んでいる。遺構を確認することはできなかった。

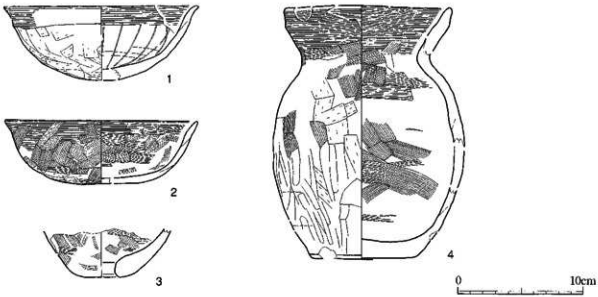
遺物は出土していない。

7）出土遺物

第Ⅰ層中から体部外面に明瞭な段を有し内面に暗文状のヘラミガキの施される土師器C－989坏（第20図1）、外面口縁部にヨコナデ、内面にヘラナデの施される土師器C－990坏（第20図2）、底部単孔の土師器C－991甑（第20図3）、器高に比べ口頸部の長さが長い土師器C－992甕（第20図4）の4点が出土している。第164次調査区で出土した遺物は、これらを含めて以下の通りである。

	土師器	須恵器	磁器	陶器	鉄滓	鉄製品	瓦		計
Ⅰ層・表採	101	2	3	3	3	2	1		115
第層1面	1								1
SI1031	16	1							17
計	118	3	3	3	3	2	1		133

第3表　第164次調査区出土遺物一覧表



図中番号	遺物番号	種別	器種	出土地点 出土遺構	出土地点 層位	遺存度	法量(cm) 器高・長	法量(cm) 口径・幅	法量(cm) 底径・重	外面調整	内面調整	備考	写真図版
1	C-989	土師器	坏		Ⅰ層	1/3	5.9	15.5		口縁部ヨコナデ、摩滅が著しい 体部ハラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 部所支状ヘラミガキ		7－19
2	C-990	土師器	坏		Ⅰ層	1/2	5.2	15.3		口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ		7－20
3	C-991	土師器	甕		Ⅰ層	底部	3.7		2.8	体部ヘラナデ	ヘラナデ	孔径2.0－2.2cm	7－21
4	C-992	土師器	甕		Ⅰ層	3/4	20.2	13.2	8.0	口縁部ヨコナデ 体部上部ヘラケズリ、ヘラナデ 体部下部ヘラミガキ 底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 底部ヘラナデ		7－22

第20図　第164次調査区出土遺物（1/3）

4．まとめ

第164次調査は遺跡の南側中央、郡山廃寺の西に隣接する地点で、平和62年の第70次調査ですでに遺構の確認調査が行われていた箇所である。今回の調査では第70次調査で確認されていた掘立柱建物跡１棟、竪穴住居跡４軒、溝跡２条などを改めて検出し、追加の調査を行った。なお、第70次調査と重複のないＤ～Ｆ区については、全面に渡って耕作による攪乱を受けており、新たな遺構を確認することはできなかった。出土遺物も少ない。

Ａ区のSI1031竪穴住居跡は南北に長い住居跡で、郡山廃寺に隣接し寺院を構成する他の遺構と同一方向であることから、郡山廃寺と関連し、同時に建っていた可能性が高いと考えられる。第164次調査では床面とそれより下層を調査し、床面上で柱穴の可能性があるピット（Ｐ１～Ｐ５）を確認した。遺物は掘り方より土師器片16点と須恵器片１点が出土しているが、竪穴住居跡の使われ方を具体的に示す遺物の出土はなかった。

参考文献

「郡山遺跡　第70次発掘調査」『郡山遺跡Ⅷ』　仙台市文化財調査報告書第110集　1987.3

1　A区　SI1031竪穴住居跡（東より）

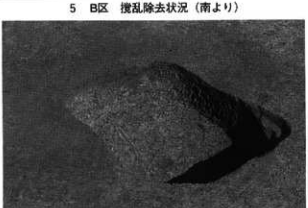
2　A区　SI1031竪穴住居跡堀り方断面（南より）

3　A区　SI1031竪穴住居跡掘り方完掘状況（北より）

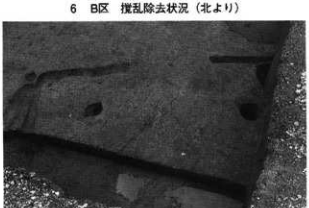
4　A区　全景（東より）

5　B区　攪乱除去状況（南より）

6　B区　攪乱除去状況（北より）



7　B区　SB1042掘立柱建物跡N3E1（南より）



8　B区　SI1036竪穴住居跡（南より）

図版5　第164次調査A区・B区

9　B区　SD1041溝跡（南より）

10　B区　全景（南より）

11　B区　東壁（西より）

12　C区　全景（南より）

13　C区　下層調査区全景（南より）

14　D区　全景（南より）

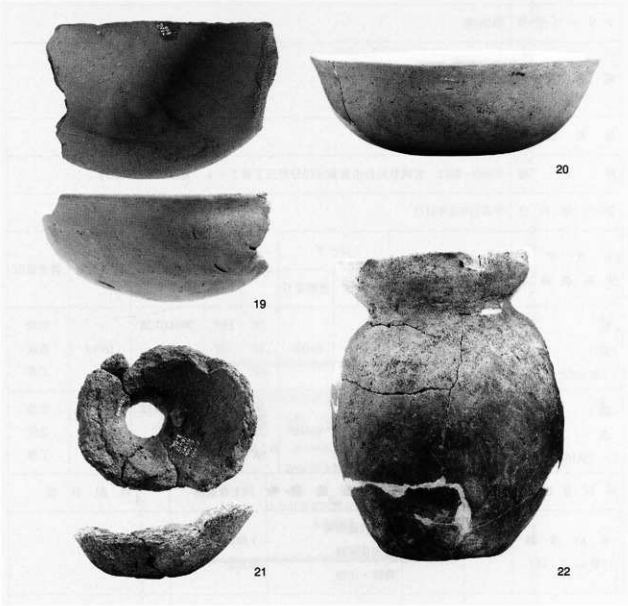
15　E区　全景（東より）

16　F区　全景（東より）

図版6　第164次調査B～F区

17　E区　北壁断面（西端部・南より）

18　E区　北壁断面（中央部・南より）



19　C－989　坏　Ⅰ層（第20図１）　　20　C－990　坏　Ⅰ層（第20図２）

21　C－991　甑　Ⅰ層（第20図３）　　22　C－992　甕　Ⅰ層（第20図４）

図版７　第164次調査E区・出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせき
書名	郡山遺跡
副書名	第162次1区・第164次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第288集
編著者名	三塚　博之
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980－8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7－1　電話022-214-8894
発行年月日	平成17年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
郡山遺跡 （第162次1区）	仙台市太白区 郡山三丁目 2－1外地内	04100	01003	38° 12′ 58″	140° 53′ 41″	2004.07.28 ～ 2004.08.27	180㎡	宅地造成工事
郡山遺跡 （第164次）	仙台市太白区 郡山五丁目 144－1及び144－8	04100	01003	38° 12′ 58″	140° 53′ 41″	2004.10.12 ～ 2004.11.02	280㎡	宅地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡山遺跡 （第162次1区）	官衙跡	古代～近世	掘立柱建物跡 竪穴住居跡 溝跡・土坑	土師器 須恵器	
郡山遺跡 （第164次）	官衙跡 寺院跡	古代～近世	掘立柱建物跡 竪穴住居跡 溝跡	土師器・須恵器 磁器・陶器 鉄製品・瓦	郡山遺跡第70次調査と重複 仙台市文化財調査報告書第110集 郡山遺跡Ⅷ

仙台市文化財調査報告書第288集

郡 山 遺 跡

—第162次1区・第164次発掘調査報告書—

2005年3月

発 行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市青葉区川分町三丁目7－1

文化財課　022(214)8893